



コード進行と金融市場のリズム

2007年夏に高値を付けた日経平均は、1年超の下落の後、本年3月以降、戻り歩調にある。相場の転換点は、テクニカル分析において、「日柄」、「波動」として、分析されることが多い。ある種「後付け」とは言え、人間の心理が流れを左右する相場に一定のリズムがあることは確かなのだろう。

実は、音楽の「コード進行」にも一定のリズムがある。例えば、「I→IV→I→I→IV→IV→I→I→V→V→I→I」とは、ブルース12小節の典型的な進行である。I、IV、Vはそれぞれ、「トニック」、「サブドミナント」、「ドミナント」と呼ばれ、音楽理論上、順に、「開始・完結」、「発展」、「緊張」を聞き手に印象付ける役割を持っている。ブルースの進行は、言葉で表すならば、「始まりを告げた後→一定の盛り上がり（発展）→一服→最大の盛り上がり（緊張）→終わり」といった展開となる。

コード進行でのポイントは、聞き手に与える発展、緊張の印象が、コード単体ではなく、前後に来るコードとの「組み合わせ」で解釈されるという点である。開始・完結を示すトニックにつながってこそ、ドミナント、サブドミナントも、楽曲の緊張感や盛り上がり、完結感を醸し出す。この辺りは、過去のトレンド、ローソク足の組み合わせで相場を解釈するテクニカル分析と似たところがある。

過去の日経平均の推移を、コード進行に当てはめるとどのような音楽が見えるか。スパンをどう捉えるかで考え方は変わるが、90年代の13,000/14,000円台から20,000円台のレンジ相場は、コード進行で言えば、「I→V→I」の繰り返し、すなわちマーチ（行進曲）のような相場であった。更に、上げ相場を明るい印象ということで長調（メジャー）、下げ相場を暗い印象ということで短調（マイナー）とすると、2007年夏以降の下げ

相場は、①日経平均が18,000円台を付けた後で始まり（I→IV）、②昨年春に12,000円割れで一旦持ち直し（IV→I）、③リーマンショックで大崩れ（I→V）、④各国財政政策・金融政策で今年春に一服（V→I）した「マイナー相場」と言えなくもない。「音楽が鳴り続ける限り、我々は踊り続けなければならない」とはCiti

の元CEOチャールズ・プリンスの言葉である。マイナーに転ずる2007年夏までの上げ相場で確かに投資銀行マンは明るく踊っていたのであろう。

歴史を紐解くと、上がり続ける相場もなければ、下がり続ける相場もない。個人的には、日経平均が7,000円を割ろうとした今年春で、「マイナー相場」は1つの終わりを告げたと考えたい。新しい相場には明るい長調がよく似合う。（池田 雅史）

